戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

PDF版第16号　2026年9月号

8月10日発行



入隊したらさぁ大変！自衛隊　練馬パネル展2026
7月14日・15日　チラシ
詳報はp

https://archive.org/search??query=creator%3A”戦争に協力しない！させない！+練馬アクション”

小特集 戦後81年目の９月を前に

【巻頭言】 地震･自衛隊･差別排外主義

７月28日、熊本を震災が襲った。マスメディアは、長射程ミサイル配備に大きな反対の声があがっていることは等閑し、何時ものように“自衛隊の活躍”を報じている。地震で基地に備蓄されている燃料や弾薬が暴発したらイオンのガス爆発どころではない被害が生じるにもかかわらず、そうした観点からの報道はついぞ見ない。隊員不足に悩む自衛隊は、またぞろ“活躍”を隊員集めのネタにするだろう。



防衛省・自衛隊は、隊員不足の解消策の一つとして、退役隊員の就職先の確保を進めようとしている。そのために、自衛官・家族支援法を制定しようという動きも出て来た。それを先取りするかのように、政府は７月28日の閣議で、「不法滞在者」の摘発強化や在留審査の迅速化を図る目的で出入国在留管理庁の体制を緊急に強化する改正政令を決定、職員226人増員することにし、それへの応募を退職した自衛官や警察官らに呼び掛けることにした。在郷軍人会のメンバーが関東大震災時の朝鮮人虐殺を主導したことを想起させる。そもそも日本の入管体制の根底には外国人敵視が存在するが、軍事的敵視の暴力性は治安的観点での敵視の比ではない。軍事的観点の敵視の目的は敵の殲滅だ。その論理が朝鮮人虐殺を生んだ。

地震・軍事組織・差別排外主義の連動・・・。そして、情報部隊による「敵性民」情報収集・・・。山崎今朝弥が『地震・憲兵・火事・巡査』で書き残した世界は、戦後81年目の９月を前にしても、決して過去のものではない。その現実から目を背けることなく、過去の二の舞にならない未来を目指そう。 **池田五律**

【オピニオン】 外交不在―混迷の震源Ｄ・トランプ＆高市早苗　　菅孝行（批評家）

トランプと高市の乱心は始末に負えない。トランプはイランとの協定に署名しながら、もう交渉は嫌といって攻撃を再開した。停戦協議中の武力衝突は珍しいことではない。だが、交渉は嫌、と駄々をこねるのはあまりに醜悪だ。トランプが勝手に始めた戦争の尻拭いをさせられた「アメリカファースト」一筋のバンスの梯子も外した。その上、戦闘再開でトランプの企業が大儲けの様子なのも許し難い。空爆ではイランは壊滅しない。本格的地上戦はアメリカ軍がもたない。やればただ人が死ぬ。

プーチンも習近平も、恥も外聞もなく国家エゴ剝き出しの独裁者だが、彼らは一貫した確信犯である。出方は察知しやすい。かえすがえすもプーチンのウクライナに対する領土的欲情を察知できなかったＥＵ中枢の鈍感は致命的だった。台湾で習近平相手にこの轍は踏めない。これが高市には全く判っていない。

愚鈍な超ナルシスト・トランプには自国の軍事力・経済力に対する客観的自己評価がない。空爆でも報復関税でも条約離脱でも外国人排除でも、その都度の恣意が隘路に嵌り、朝令暮改を繰り返す。外交が成立しない。ＥＵ（独仏伊西などＥＵ諸国には「大戦」の教訓に学んだ帝国主義の自制＝外交がある）はトランプが「西側」の盟友でないことを認識した。高市は気づいていない。

17世紀のヨーロッパの権力者は三十年戦争の教訓を、主権国家の不可侵を原則とするウェストファリア条約に落とし込んだ。プーチン・習近平・トランプが、これを根底から破壊した。四百年後の軍事力・経済力の巨大さは桁違いだ。世界全体が「自然状態」になると、人命もインフラも、被害は17世紀の比ではない。ガザ殲滅や気候変動の深刻さで証明済みである。だがトランプはガザ殲滅に有頂天だし気候変動をフェイクだと嘯く。帝国主義の自己防衛の知恵さえ欠けている。

トランプの「ジャイアン・リサイタル」の致命的なリスクに最も鈍感なのは全世界の政権で高市だろう。高市も自国の現状の客観的評価に無知である。トランプに媚び、習近平を挑発すれば何とかなると思い込んでいる。高市にも外交がない。その上、物価高騰を放置しても消費減税を等閑に付しても内政は逃げ切れると、大勝した選挙で錯覚してしまった。だから麻生と組んでヌクヌク藤原家ばりの「ロボット天皇」作りに励み、維新と議員定数削減だの副首都構想に現を抜かしている。国旗損壊法まで作った。夜寝ないで「働いている」という自慢は噴飯ものだ。

トランプと高市の違いは、レームダック化する前に、大統領特権を僭称してゲリマンダーや軍事クーデタをやらかす潜在力があるかどうかだ。議院内閣の長に過ぎない高市には無理である。それが「救い」だ（笑）。将来、主権者が日本を共和制国家にした時にも大統領権限は厳しく制限する必要がある。アメリカ民主主義は選挙での白紙委任に無警戒だった。自戒も込めていう。どこの国の主権者も、理想の政治の形を投票の前に構想できるだけの知恵は持ち合わせていない。

【活動日誌　7月6日～8月5日】

７月６日　辺野古への基地建設を許さない実行委員会、防衛省前行動。戦争に協力しない！させない！練馬アクションが申し入れ。

〔資料〕

高市早苗　　内閣総理大臣　殿
小泉進次郎　防衛大臣　　　殿

辺野古新基地建設の断念と普天間基地の即時全面返還を求める申し入れ

米軍等による国際法無視の不意打ちで始まったイラン戦争で、湾岸諸国はイランから攻撃された。米軍基地があるからだ。米軍基地は、戦争を抑止しない。民衆の生命を脅かすだけだ。イラン戦争は、沖縄に集中している在日米軍基地がいかに危険な存在かを物語っている。

米軍基地は、平素から民衆の生命を脅かす。沖縄の米軍兵士・軍属による犯罪は、その典型だ。にもかかわらず日本政府は、犯罪を行った米兵が処罰を免れる要因になっている不平等な日米地位協定の見直しすら求めようとしてこなかった。イラン戦争には、在沖米海兵隊も投入されている。戦争で心に傷を負った米兵の制御できない暴力が、沖縄はじめ米軍基地周辺で噴出するおそれがある。早急に、米兵犯罪を抑える施策を取り、地位協定の見直しを求めるべきである。

イラン戦争での在沖米海兵隊の投入は、日米安保条約に基づく日本政府の米軍への基地供与が沖縄を米軍の要石に据え置き、私たちを加害者の立場に立たせることを、改めて明らかにした。米軍は、世界中に展開する要石である在沖米軍基地を手放そうとしない。海兵隊の現役中佐が「辺野古新基地は普天間より機能が劣るため、両方維持すべきだ」という論文を発表する始末である。ところが日本政府は、辺野古新基地建設が普天間基地返還の「唯一の解決策」だと言い続け、工事を強行している。だが、軟弱地盤への砂くい打ちはじめ、遅々として建設は進んでいない。計り知れない環境破壊をもたらす“工事のための工事”と言っても過言ではない。

日本政府は、平和学習で辺野古を訪れた高校生を乗せた船の転覆事故を奇貨として、反対運動つぶしにやっきになっている。文科省が上記平和学習を「特定の見方・考え方に偏っていた」として、「政治的活動を禁じる教育基本法14条に反する」と断じるなど、まさに省庁横断的な攻撃だ。だが、いくら反対運動をつぶそうとしても、“工事のための工事”の矛盾は隠しおおせない。

米軍への基地供与だけが問題ではない。今や日米安保は、米軍の肩代わりをし、自衛隊が対中最前線を担うものへと変質している。「台湾有事＝存立危機事態」発言で日中関係を最悪の状態に陥れた高市首相は、発言を謝罪・撤回するどころか、日豪、日比の軍事協力を強化し、両国への武器輸出も進めるなど、対中包囲網形成に力を入れている。琉球弧の自衛隊の増強は止まるところを知らない。熊本・健軍などには、先制攻撃にも使用できる長射程ミサイルも配備した。６月20日から行われた「レゾリュート・ドラゴン」など、“戦争さながらの軍事演習”も断続的に実施している。現代版の防空壕＝シェルター建設や現代版の強制疎開＝国民保護計画と、沖縄戦の歴史を無視した住民の犠牲を前提とした“戦時態勢”も築こうとしている。自衛隊掃海部隊のペルシャ湾派兵も目論んでいる。米軍の戦争の後始末だ。いかなる口実のものであれ、自衛隊の海外派兵は自衛隊の外征軍化の道である。それは、沖縄をインド太平洋地域はじめ世界各地に展開する自衛隊の要石にすることにもつながっている。

今なすべきは、このような日米安保の強化ではない。沖縄を米軍が世界に展開するための要石として維持・強化し、自衛隊が対中最前線を担う日米安保そのものを今こそ、問い直すべきである。その第一歩として、辺野古新基地建設を断念し、普天間基地の即時全面返還に取り組むことを、日本政府に強く求めるものである。

以上。

2026年７月６日

戦争に協力しない！させない！練馬アクション

７月 10 日　改憲反対！高市首相は退陣！退陣！７・10 官邸前行動　呼びかけ：戦争‣治安‣改憲 NO！総行動＋α
７月 11 日　池袋アクション　池袋東口・西武口　歌とスピーチ　トランプも高市もいやだ！
７月 13 日　戦争に協力しない！させない！練馬アクション第二月曜学習会
　８．６広島―８．９長崎を前に、福島原発事故被災地の今を知り、核と原発について考えよう！
　問題提起　宮下智行さん（福島こども保養プロジェクト@練馬）
　植民地的復興とイノベーションコースト構想（エフレイ）　付：検証！国民投票法＝改憲手続法

7月 14―15 日 入隊したらさぁ大変！ 自衛隊 練馬パネル展 2026

〔報告〕

私たち「入隊したらさあ大変！自衛隊」練馬パネル展実行委員会は、練馬区役所ロビーで自衛隊が行う募集広報パネル展に対抗して、自衛隊の本当の姿を知っていただくためのパネル展を毎年開催して、６年目になる。


自衛隊のパネル展

今年の自衛隊側のパネル展（６月 8～11 日）は例年に増してショボかった。広いロビーにわずか 24 面で、説明・募集担当者は所在なく突っ立っているだけ。私たちの「直ちに中止してください」というチラシ撒きがむなしく感じられるほどだった。

自衛隊側のパネル展に対抗して私たちは６月９日、同じ区役所最上階の交流会場で、「自衛隊への男女共同参画とは」と題する講演会を開催した。講師は日体大の久保田茉莉さん。著書『軍隊への男女共同参画』で平塚らいてう賞を受賞した、新進気鋭の憲法研究者だ。用語は固いが、以下その論旨。


久保田さん講演会

女性兵士はジェンダー平等の前進なのか、という問題意識がある。肯定的に見るフェミニストは、女性の自己決定権や女性の参入による軍事組織の変革を挙げる。しかし軍事組織では人権制約や命令服従義務によって、むしろ自己決定権を放棄することになる。また強い男性性が軍人の要件であって、軍隊内では男女は平等ではありえないという現実がある。

フランス軍では女性が２割と高率だが、その実態を見ると、文民が 38%を占める。女性は後方支援部隊では 30%、うち衛生部隊が 58%。管理部隊 40%。作戦部隊では 4%にすぎない。雇用形態格差や賃金格差もあり、女性の昇進は困難だ。ジェンダーハラスメント、セクシュアルハラスメント、性暴力では加害者が免罪されることが多い。軍隊が国家公認の暴力装置であることから、女性を二流の存在とみなす風潮がある。軍隊内の女性は、名誉男性と他の女性とに分断される。

対抗して、平和主義とフェミニズムがある。古くは母性＝平和主義とする主張があった。平和主義とフェミニズムの理論的関係が問題認識となり、軍人社会と非軍人社会における暴力の連続性、戦争や軍隊から女性が受ける被害が研究された。現代の運動では、男女平等なしに平和の構築なしとされる。国連では安保理決議「女性、平和、安全保障」が出され（2000 年）、約 30 の市民団体による『平和白書』が刊行されている（2018 年）。平和主義とフェミニズムは非暴力によって結ばれている。



近代国民国家は公的暴力として軍隊を、私的暴力として家長の暴力を非犯罪化した。そのアンチテーゼが日本国憲法だ。９条で軍隊不保持を、24 条で個人の尊厳と両性の本質的平等を定めた。憲法研究者の中里見博さんは「社会全体を非暴力化するためのプロジェクト」が日本国憲法だと言い、同じく清水愛砂さんは９条と 24 条は「非暴力を核とする平和主義を支える両輪」だと言う。

私たちのパネル展は７月 14、15 の両日、練馬駅前のココネ

リ（練馬区立区民・産業プラザ）で開催された。76 枚のパネルは 6 部構成で、第 1 部・入隊したら、こんなに大変　第 2 部・絶えないセクハラ、パワハラ　第 3 部・虐待死、いじめ自殺も　第 4 部・あの手この手で隊員募集　第 5 部・他にも知っておいたほうがよいこと（治安出動や朝霞駐屯地の役割など）　第 6 部・私たちの活動（「練馬まつり」への自衛隊車両展示、練馬駐屯地師団祭などへの対応）。防衛省発表やマスコミ報道などからまとめ、データは毎年更新している。両日とも 40 分ほどかけて、私がパネル解説をした。

各地で「平和のための戦争展」などが開催されているが、自衛隊の実態に特化した展示会は他には見当たらないようだ。来場者は酷暑のためか昨年より少なく、110 名だった。第 2 会場には 40 点の参考文献を並べて自由に読書ができるようにした。


講演中の黒井さん

第 3 会場には資料映像を流し、14 日夕には黒井秋夫さん（PTSD の日本兵家族会・寄り添う市民の会代表）の講演会「戦争トラウマを生きる」を開催した。これが圧巻だった。ベトナム帰還兵の証言から自身の父親が PTSD だったことに気づき、会を立ち上げて全国を歩いたこと。戦地から帰った日本兵の心の傷は家族に深刻な影響を与え、その暴力による被害は子や孫にまで伝わること。米国の PTSD は兵士の 2 割から 5 割に達すると想定されていること。自衛隊にも当然、PTSD が多数発生していると思われること。黒井さんの武蔵撫養山市の自宅内に開設した「PTSD の日本兵と家族の交流館」に子どもが大勢訪れること。

質疑討論の時間は少なかったが、まさに父親の戦争による PTSD のため家族が苦しんだ人、また自衛隊でパワハラを受け精神を病みながら訴訟を闘っている人の発言があり、これまで自衛官との接点のなかった黒井さんの活動にも新たな展開となった。

なお、私たちの作成したパネルは貸出もしており、各地への出張展示を希望している。黒井さんの交流館の見学は E メール qqkc6av9@ceres.ocn.ne.jp で予約を。

（大内要三）

7 月 25 日　大軍拡と基地強化に NO!アクション２０２６発足集会
STOP！高市政権による戦争国家化 7・25 集会
お話：軍需産業と地域―愛知・名古屋から考える
山本みはぎさん（不戦へのネットワーク・愛知）
7 月 26 日　日本版 ICE をつくらせない　退役自衛官を「外国人摘発」に使うな！官邸前行動
8 月 1 日　稲荷山公園日本軍施設見学会&稲荷山公園計画（500 世帯立ち退き）のお話を聞く会
8 月 10 日　戦争に協力しない！させない！練馬アクション　第二月曜日学習会
戦争・スポーツ・ナショナリズム―国旗損壊罪とサッカー・ワールドカップを中心に



追悼　宮本なおみさん

池田五律



７月10日、宮本なおみさんがお亡くなりになった。『革新無所属』（オーロラ自由アトリエ、2008年）という著書のタイトルが示すように、まさに革新無所属の女性議員の草分け的存在だった。僕が東京に出て来た1979年には、目黒区議三期目。僕が本格的に学生運動を始めた1983年には四期目。既に宮本さんは神話的存在だった。遠くから仰ぎ見る存在だった宮本さんと直接お話しするようになったのは、僕が総評左派&新左翼労働運動雑誌『新地平』の編集者になってからのことだったと記憶している。運動をご一緒したという感じが持てたのは、ＰＫＯ法反対闘争あたりからだろうか。無論、僕はその末端にいただけなのだが・・・。クリントン来日反対の実行委を立ち上げる相談を持ちかけた時に、「ゴリっちゃん」と呼ばれたことを記憶しているので、その前には認知していただいていたのだと思う。同じ頃、沖縄での少女暴行事件が起き、それに対して何かやらないのかと言われたのを覚えている。何と言ってもありがたかったのは、石原慎太郎都知事がやった「ビックレスキュー」に対する反対闘争。宮本さんから「一緒に回ってあげるからついてきなさい」と言われ、東京交通労働組合（東交）本部などに連れて行ってもらった。感謝感激！

近年は、よく練馬の集会にも来てくださった。何時どの時点から知己を得たのか分からないが、2024年に亡くなった「戦争に協力しない！させない！練馬アクション」の主要メンバーだった横山哲也さんは、宮本さんと親しくしていた。宮本さんが入所していた新潟の施設にも行っていたし、ひばりが丘の施設にも訪ねていたようだ。そんなこともあり、昨年の横山哲也さんを偲ぶ会の際には、故人の年上の運動上の知人代表ということでスピーチをしていただいた。「その内、ゆっくりお話ししたいです。連絡します」と言ったのだが、父母共に入退院を繰り返す状態になってしまったこともあり、そのままになってしまった。「テッちゃん（横山哲也さんのこと）いなくなっても、ゴリっちゃんしっかりね」と励ましていただいたのに・・・。

『革新無所属』を読み返すと、宮本さんは、母と一歳違いでしかない（宮本さんが一歳上）。高卒間もなく結婚し、1960年には僕を産んで、保守的で差別的な考えに自縄自縛された専業主婦人生を送った母と、なんと宮本さんの人生は違うことか。宮本さんは、三春で過ごした高校時代、テニス部に属し、「うたごえ運動」に参加したりしていたそうだ。井上清の『日本女性史』を読んで感動したことが、「女性の自立と社会変革への「道」を求めるきっかけ」となったとも書かれている。高校卒業後、洋裁学校に通い、20歳で東京のあるデザイナーのもとで住み込み女中兼針子とそれがして働き始める。二年後に結核になり、療養所生活を送る。その後、共産党に接近し、離れ、1965年の原潜寄港阻止や日韓条約反対闘争を経て、ゴム工場で臨時工として働き、地域の反戦青年員会に属し、1967年10・８羽田闘争では「狸穴橋」へ。「若い女子工員たちとつき合いながら、シモーヌ・ベーユ気取りだった」とも回想されている。日本婦人会議中央本部の専従になり、「大きいお腹を抱えて三里塚に出向」いたり、目黒救援連絡センターを立ち上げたり・・・。だが、総評の「反戦派」排除論が、日本婦人会議にも波及。結成準備中だった「侵略＝差別と闘うアジア婦人会議」について、日本婦人会議内の内部論争が激しさを増す。そうした状況の推移を見つつ、宮本さんは、1970年に日本婦人会議中央本部を退職し、地域に拠点を築くことを目指し、翌年の統一地方選出馬の準備に入る。そして出馬と共に、社会党を除名になる。

疾風怒濤の60年代だ。ご苦労も多かったと思うが、「遅れに遅れて来た世代」の僕には羨ましくもある。宮本さんは、『革新無所属』の中で、その時代を回顧して、以下のように書いている。

> …いわゆる「内ゲバ」問題については、関わった人びとすべてが自分たちのかつての路線を検証し、反省を加えなればならないのだと思う。／戦争に反対し、平和を求めている私たちは、武力を用いての解決の一切を相容れないものとして、いま改めて明確にしなければならないと思う。戦争に正義はない。理不尽な国家権力

の行使に対してでさえ、非暴力での不服従を通さなければならないと思うのだ。／略／絶対平和主義者の一人でありたいと思う私は、六〇年代にそうした主張をしたかといえば、からっきし駄目であった。・・・

いわゆる「内ゲバ」時代の後に、それがもたらしたペンペン草も生えない状況の中で、何とか運動の存在が許容される状態を創り出そうと呻吟しつつも、「内ゲバ」時代の結果責任を問う一方で、「正義の戦争」はあるとの前提に立っていた自分にとって、湾岸戦争とそれに続くＰＫＯ法反対闘争は、「正義の戦争」自体を否定する機縁になった。僕が 30 歳前後のことだ。その頃に宮本なおみさんたちに学ばせてもらったことが大きい。

最後は、宮本なおみさんに誓いの言葉で締めくくりたい。

非暴力・不服従を通すという原則を堅持して反戦運動をしていきます！

といっても、まなじり決した決意表明にはしたくない。『革新無所属』所収の「解説インタビュー」のタイトルは、「時代の流れに身を任せたら闘っていた」。

宮本さん！　僕も、そんな感じで闘っていきます！

ＰＳ　『革新無所属』には、区議時代の様々な取り組みや区議をお辞めになった後の様々な取り組みも書かれている。それらに言及することができなかった。是非、ご一読いただきたい。最後にもう一つ、エピソード。横山哲也さんの偲ぶ会の折、北区で共産党区議を 10 期務められた八百川孝さんを宮本さんに紹介した。お二人が歓談している姿は、80 年代にはおよそ想像できないものだったと思う。そんな機縁を作った横山哲也さんもすごかったと、改めて思う。三回忌は死亡日から満二年に行う法要だと言うが、それに則すと、今年の９月は横山さんの三回忌ということになる。宮本さんへの追悼文の追伸ではあるが、横山哲也さんにも改めて感謝を記させていただかせてもらう。もうアッチで二人は会ってるか！？

追悼　大冨啓さん

中川信明

あまりにも、突然の死だった。

6 月 28 日の夜、忙しく一日メールを開いていなかったら、午前中に大冨さんの訃報が届いていたことに気がつき、唖然とした。その週の火曜日 6 月 24 日に、6 月 27 日の教育問題交流会の会議を休止することを、大冨さん他、教育問題交流会のメンバーに同報メールした。いつもであれば、大冨さんから何らかの返信があるのに、何もないのでちょっとおかしいな、とは思っていた。いまだに、死因はわからず、苦しまれたのか、安らかに死なれたのかもわからない。胸につかえが残ったままだ。

練馬教育問題交流会の初期からのメンバーであった。朝鮮学校とともに！練馬の会、ヘイトスピーチは許さない練馬、東京朝鮮第三初級学校とともに歩む会等でご一緒した。集会の受付や会計をいつも担ってくださった。会議では、いつも正論を貫き、教育委員会交渉でも臆することなく発言された。学校職員の長い経験から、「日の丸・君が代・元号」反対を貫き、いつまでも子どもたちや学校の問題にこだわりを持ち続けられた。農民運動のリーダーであったとお父さんに誇りを持たれていて、毎年秋には、実家から魚沼産コシヒカリを取り寄せ、「おすそ分け」してくださった。

大冨さんには、闘い半ばで斃れた無念さがあっただろう。その反権力の思いを継承していきたい。

［編集部より］

部落解放同盟・練馬支部長だった堀純さんも新潟出身だった。堀さんのお父さんは、社会党の地方議員をされていた。堀さんが亡くなる直前、堀さんを病床にお見舞いした大冨さんから、「堀さんと二人で、池田君のように保守的な親の子どもの方がいいよね、なんて話したのよ」とお聞きした。どういう意味だったのだろう。あっちで続きの話をしているのだろうか。横山哲也さんも、高校時代を新潟で送った人だった。大冨さん、堀さん、横山さん他で、新潟料理を食べに行ったりしていたなぁ。もう会ってるかな。あの世の方が、だんだん人数、多くなる！　読者の皆さん！　逝き急ぐのはやめましょう！　生き抜きましょう！　**池田**

【チェックポイント】 骨太の方針2026批判―軍需関連産業中心の「強い経済」への国民総動員

7月21日、「経済財政運営と改革の基本方針」、いわゆる「骨太の方針」の2026版が閣議決定された。それは、総合的な国力強化の中核に「強い経済」の実現を位置づける。その実現に向け、投資拡大、供給力強化によって投資不足ゆえに低迷している潜在成長率を引き上げると言う。新自由主義的なサプライサイド・エコノミックスである。中央銀行の独立性の高い金融政策を否定する点ではマネタリスト的である。だが、政府による積極財政を進めると言う点ではマネタリストとは対極的だ。とはいえ、公共事業などによる雇用創出―有効需要喚起を図るケインズ主義ではない。政府が莫大な投資をすることで、それを信頼した民間が同投資対象への投資を拡大するという中露型の国家主導型資本主義とでも言えようか。

財政については、経済成長率上昇による税収増という取らぬ狸の皮算用。「責任ある積極財政」というが、財政無策と言っても過言ではない。放漫財政に歯止めをかける予算編成の単年度主義も放棄する方向が打ち出されている。補正予算という姑息な手段は用いないというのが建前だが、青天井の財政膨張を許すことになりかねない。莫大な国策投資は、国策利権に群がり食い物にするモラルハザードを招く。この利権は、政治腐敗・官僚腐敗の温床にもなる。経済成長につながらず、財政破綻を招き、国債も暴落する。ツケを国民に回すしかない。曰く「働き方の多様化や女性・高齢者の就労増加に対応し、働くことが報われる社会保障制度を目指」し、「現役世代の保険料率の上昇を止め、引き下げていくことを目指す」。要するに、「働け、稼げ、税金払え、働かない者には社会保障もしてやらないぞ」ということだ。

「成長戦略」の中核に位置づけられているのは、危機管理投資・成長投資である。それを「エネルギーや資源安全保障、科学技術・イノベーションを始めとする成長基盤の強化、地域の稼ぐ力、人材力の強化、強い外交・安全保障の確立及び国民の安全・安心の確保を一体的に推進する」と言う。すべてが国家安全保障に従属する形で組み立てられていると言ってもいい。危機管理投資・成長投資の対象が、軍事関連分野であることは、その端的な表れだ。故に、危機管理投資・成長戦略は経済安保と表裏一体と位置づけられ、その司令塔は国家安全保障局とされている。

狭義の「安全保障の強化」については、「高度に自律的で強靭な能力の発揮のため、装備・体制の両面で５年以内に防衛力を変革する。データとＡＩの活用、無人アセット導入、反撃能力にも活用し得るスタンド・オフ防衛能力の強化等により、「新しい戦い方」に適応する。激化する人材獲得競争も見据え、給与体系の改定を始め、自衛官の処遇改善や長期活用等を推進するとともに、退職自衛隊員・家族への支援について、新たな庁の設置を含め取組の強化を検討する。また、防衛省の組織を抜本的に強化する」としている。「外交と防衛を車の両輪として・・・外交力を抜本的に強化する」と言うのだから、平和外交という発想はない。「日米同盟を基軸に、Ｇ７、ＡＳＥＡＮ、豪、印、韓、ＥＵ、ＮＡＴＯを含む同志国・機関等、また、グローバル・サウスとの連携を強化する。あわせて、進化した「自由で開かれたインド太平洋（ＦＯＩＰ）」の取組を推進する。政府安全保障能力強化支援（ＯＳＡ）及び安全保障・経済安全保障に資するＯＤＡの規模を拡大し、地域の平和と安定に貢献する」と、対中包囲網形成を打ち出す。経済外交も同じ。

こうした内容が、年末とも言われる安保三文書改定にも反映されることは必至だ。

しかも、「国民の力、ピープルズパワーを日本の成長の原動力に変えていくという姿勢が求められている」というのだから、骨太の方針2026は、国民総動員宣言と言っても過言ではない。

なお、情報力強化も明記。「退職自衛隊員・家族への支援について、新たな庁の設置を含め取組の強化を検討する」ことも盛り込んだ。当面。退職自衛官の就職斡旋が狙いという。入管への送り込みが、その端緒とされそうだ。宇垣軍縮に伴う退役軍人を学校での軍事教練担当として送り込んだような動きにも要警戒だ。自衛官になれば、退職しても他分野の公務員になれるという仕組みを創り、隊員集めに役立て、退職隊員を通して社会を軍事化するという一石二鳥狙いということか。さらに将来的には、戦傷者・家族、戦没者家族への援護態勢構築につながっていくと思われる。自衛官・家族支援法に反対する準備に入らねばならない。

国民総動員は差別・排外主義とセットである。「出入国在留管理庁の人的・物的体制を抜本的に強化し・・・『不法滞在者ゼロプラン』を強力に推進する」という（その「人的体制強化」が退職自衛官の導入)。「育成就労制度の円滑な施行・不法就労対策のために必要な体制を整備」や「日本語及び我が国の制度・ルール等の教育を強化」も盛り込んでおり、管理・選別・同化も目論んでいることも忘れてはならない。

文責:池田五律

小特集 戦後81年目の９月を前に

【読書案内】 東京の満蒙開拓団を知る会著『東京満蒙開拓団』(ゆまに書房、2012年)



「戦争に協力しない！させない！練馬アクション」のコアメンバーだった横山哲也さんが亡くなって二年が経とうとしている。横山さんは、“満蒙開拓移民”に強い関心を持ち、資料を集めていた（その動機、集めた資料をどうしたかったのか、よく分からない)。生前、「一度、練馬で“満州開拓移民”についての集会を持ちたいね」と話していた。大泉学園に、東京市大泉労働訓練所という移民送り出し施設があったからだ。大田区の市民運動、「東京の満蒙開拓団を知る会」（以下、「知る会」）の皆さんが、『東京満蒙開拓団』という本を出しており、その著者のお一人である藤村妙子さんが学校とかで講演されていることを池田は知っていたので、「訓練所があった近くの石泉（石神井公園＆大泉学園）地区で藤村さんに講演してもらおうよ」と勧めていた。「やろう！やろう！」と言っていたのに実現しないまま年を経て来たが、ようやく今年９月、藤村さんを呼んでお話を聞く場を持つことになった。で、この本を紹介することにした。

“満州開拓移民”と言えば、長野県など農村部からの移民を思い浮かべる人が多いだろう。だが、商店街ぐるみで移民した大田区の荏原郷開拓団はじめ、東京からも十を超える開拓団などが移民している。そのこと知ったことが、「知る会」を結成し、調査を始めるキッカケになったそうだ。その成果が、満蒙開拓団の著名な研究者だった井出孫六をして「まだ世に問われていない」状態だった「東京開拓団の全貌があかるに出た！！」と言わしめた本書である。

目次

満蒙開拓団と言えば、ソ連参戦、逃避行を思い浮かる人も多かろう。だが、開拓団がなぜ存在したのか？ 本書は、その理由・過程を詳らかに追いかけている。

満蒙開拓団は、傀儡国家・満州国建国からの試験移民期と二・二六事件以降の大量移民期に分かられる。東京からの移民は、大恐慌に伴う都市困窮民の増大に加え地方の困窮民の流入者を試験移民として送り出すものだった。第一章で取り上げられている天照園について、当時の朝日新聞は「ルンペン更生の一大福音の活路」と書いている（1932 年６月９日・朝刊)。「知る会」の人たちは、この状況とリーマンショック後の派遣切りの状況を重ね合わせている。本書は単に歴史的関心によるものでなく、現在的な問題意識に貫かれた市民による調査研究の賜物と言えよう。

天照園移民の末路は、まさしく「試験」的。ハッキリ言えば、失敗。1932 年６月から 1936 年まで合計 125 人が送り出され、1936 年 10 月時点で入植地に残っていたのは 59 名だった。移民とは棄民だったことは明らかだ。天照園は、大不況下で設置された東京府救護委員会が助成した民間の無料宿泊所の一つを運営する団体だった。東京府救護委員会は、失業者更生訓練施設事業を、民間の「国家主義的側面の強い社会教育団体」であった修養団などに委託する。社会事業を官許の民間団体に委託して「救済」の名で国策に動員・使えない者は棄民する手法も、現在も形を変えて見られるのではないか。

第三章で取り上げられている多摩川農民訓練所は、委託運営された施設の一つ。当初は「将来満州移住又は内地独立農民として更生せしむる」ことを目的としていたが、「満州移民専用」にされていく。訓練生は、職業紹介所を通して募集されていた。政府は「自作農主義」を謳っていたが、メディアは多摩川農民訓練所を「将来は満州の地主に仕立てよう」とするものだと報じていた。実際、そうだった。天照園移民の残存者が再編・設立した一裸樹開拓組合が経営を安定させた要因の一つも、小作料だった。地主と言ってもやっとこさ生計を維持できる程度であったようだが、でも現地住民らを小作人として搾取する側でもあったわけだ。

東京市大泉労働訓練所は、第四章に出てくる。大量移民期への対応として、東京市が設置した施設だ。他の章も紹介したいが、それは読んでの、藤村さんのお話を聞いてのお楽しみ・・・。

文責:池田五律

【雑誌漁り読み】『中央公論』2026年8月号 特集：海の地政学とイラン情勢

『中央公論』2026年8月号 特集：海の地政学とイラン情勢 所収論文
近現代200年の興亡から考える 海洋国家日本の新たな挑戦　中西寛
大航海時代、大英帝国、米中共同覇権 海洋の覇権史と21世紀の危機　竹田いさみ
「持たざる国」という宿命を直視し備えを 「アフター・ホルムズ」のエネルギー地政学　小林周
ホルムズ海峡封鎖の力学 イランの「論理」と米国の「誤算」　村上拓哉

イラン戦争の当面の帰趨がどうであられ、湾岸諸国からの石油供給の不安定化は長期化するどころか、不可逆的である。そう感じていたところ、同趣旨の論文が、**『中央公論』2026年8月号「特集：海の地政学とイラン情勢」**に並んでいた。

村上論文は、米国はイランが磨いてきた非対称戦能力の耐久力を上回る軍事力を行使できず、「海峡封鎖が体制の危機になることを示すことで、イランに海峡封鎖を思いとどませる・・・戦略」が破綻したと指摘する。そして、「戦争を通してイランが得たホルムズ海峡の管理権は、イランに自国の好きなタイミングで海峡を封鎖する権限を与えてしまったに等しい」と言う。加えて、「戦前のような海峡の開放を実現できるほどの軍事力を米国が発揮できるかは疑問である」と指摘する。

小林論文は、「同地域（中東）は世界有数の化石エネルギー埋蔵地であると同時に、近年は再生エネルギーや水素開発でも注目を集めている。ホルムズ海峡封鎖を受けて揺さぶられるグローバルなエネルギー需給についても、中東は中長期的に重要な地域であり続けるであろう」と指摘する。そして、冬季に向けた欧州の暖房エネルギー需要の高まり、フーシ派によるバーブルマンデム海峡封鎖による紅海ルートの不安定化などを予測する。それは、中長期的には、「中東情勢の緊張の継続、シーレーンの寸断、エネルギー供給の安定に対する米国の関与低下、エネルギー市場の逼迫、そしてエネルギー転換の停滞が同時並行的に進行する複合危機」という日本にとって「最悪のシナリオ」があり得ると警鐘を鳴らす。

「イランの海峡封鎖は国際法違反であり、いかがなものか・・・」とお思いの方には、竹田論文を、是非、読んで欲しい。航行の自由などの海洋をめぐる国際ルールが、広大な植民地帝国を築いてきた欧米諸国の海洋覇権を巡る争いの中で、覇権を握った国家の力と思惑を背景にして形成されてきたかがよく解る。その米英の共同覇権の帰結が、1982年に採択された国連海洋条約であった。ところが、その起草段階で、深海底の資源を先進国しか開発できないことに発展途上国が反発する。結果、開発の自由が奪われると、米国は国連海洋条約の調印を拒否した。イランが米国に国際法違反と言われる筋合いはない。調印しないなら、脱退するなら、縛られないのが国際法なのだ。国際法にも主権国家原理は貫徹されており、大国は都合よく使うか、縛られないで力を行使するか、なのだ。1996年に調印した中国は、批准しつつ、「領海法」という国内法が国際法に優先するという立場だ。「都合のよいように運用する」というわけだ。

その中国は、日本が領有する「島」だとして周囲に排他的経済水域（ＥＥＺ）を設定している沖ノ島を「岩礁でしかない」としている。それを理由に、19日に沖ノ島沖で行った射撃訓練も国際法に反しないとしている。こうした事態は、高市首相の「台湾有事＝存立危機事態」発言が招いた日中関係悪化がもたらしたものだ。直近でいえば、台湾近海も含む日比海洋境界画定交渉を海洋権益侵害とみなす中国の意趣返しとも言えよう。まぁ、日本も、航行の自由を高唱しつつ広大なＥＥＺを主張する都合のいい使い方をしているのだが・・・。

中西論文は、日中関係を強く意識している。「新しい海洋政策の中でも重要な課題が、台湾の地位と安全である」として、「日米が台湾への軍事的コミットメントを明確化することは中国の介入を引き出しうる」と述べる。高坂正堯の「海洋国家」論の中ソとの平和共存志向を引き継いで、高市路線を牽制する保守穏健派らしい発言とも言えよう。ただし、中西は、高坂の「米覇権下の海洋国家」という前提は成り立たないとしている。秩序変動を投資機会と結びつける金融資本主義化と、権威主義的体制に適合的な先端産業の寡占化を背景に、国際主義を主導するアメリカの経済的動機は弱まり、「覇権国家によって保証された海洋自由の原則は後退」するとの読みに立っている。では、「新しい海洋政策」と何か。竹田の言う「多国間主義」がオチのように思える。その多国間主義が、中西的な台湾関与牽制論でなく、対中包囲網形成論と結びつくおそれも含めて、今ははや風前の灯し火になった中央公論風穏健保守の言説も、軽視することなく、一瞥しておく必要があろう。

文責：池田五律

【マイ・ファミリー戦争・戦後ヒストリー　番外編】

野宿者の人生から日本社会を読み解く—川崎野宿者聞き取りチーム５冊のレポートが問いかけるもの—

［編集部より］ 川崎野宿者聞き取りチームの『年報』は、第１巻『敗戦・戦後』をはじめ「マイ・ファミリー戦争・戦後ヒストリー」の趣旨と合致した内容なので、同企画の「番外編」として紹介します。こんな聞き書きをする活動も反貧困の運動体と連携してやれたらすごいんだけど・・・・



「聞き取り」を積み重ねた 20 年

このシリーズの最大の特徴は、調査方法にある。聞き取りチームは、川崎市内の路上や河川敷で 20 年以上にわたりパトロール活動を続けながら、野宿者との信頼関係を築いてきた。その場限りのアンケートではなく、何度も顔を合わせ、時には数年にわたって対話を重ねた上で人生を聞き取っている。

そのため、レポートには行政調査では決して表れない内容が数多く収められている。幼少期の思い出、家族との関係、仕事への誇り、故郷への複雑な感情、戦争体験、沖縄への思い、病気や失業、そして野宿に至るまでの過程が、一人ひとり異なる人生として語られる。往々にして「現在の状態」のみが注目されるところを、このシリーズは「なぜその人が現在そこにいるのか」を、生涯全体の文脈の中で理解しようとしている。これは社会調査であると同時に、人間の尊厳を守る実践でもある。

第１巻『敗戦・戦後』—歴史教科書には載らない戦後史

シリーズ第１巻『敗戦・戦後』は、沖縄出身の野宿者 42 人への聞き取りを通して、沖縄戦、米軍基地、戦後復興、引き揚げ、被爆、占領といった戦後史を描いている。興味深いのは、戦争を「歴史」としてではなく、「生活」として語っていることである。祖父母や親から聞いた沖縄戦の記憶、戦後の貧困、基地の存在、復帰前後の生活、子ども時代に見た風景などが断片的ではあるが生々しく語られる。そこには英雄も政治家も登場しない。登場するのは、市井の人々である。教科書では一行で終わる出来事が、一人の人生では何十年にもわたる影響を及ぼしていることがわかる。戦後 80 年を迎える現在、この証言集は歴史資料としても極めて重要な意味を持っている。

第２巻『コロナ・資源ごみ』—感染症は最も弱い立場の人を直撃した

第２巻は、新型コロナウイルス感染拡大の中で野宿者がどのような状況に置かれたかを記録している。感染症対策では「三密回避」「不要不急の外出自粛」が叫ばれた。しかし、家を持たない人にとって「自宅待機」は存在しない。炊き出しが減り、空き缶価格が暴落し、資源ごみ回収の規制が生活を直撃する。マスクや消毒液を手に入れることも難しく、福祉施設も感染対策のため利用しづらくなった。一方で、聞き取りチーム自身も感染リスクを抱えながら支援活動を続け、その記録を残している。この巻は、コロナ禍を「社会全体の出来事」としてではなく、「最も弱い立場にいる人々が何を経験したのか」という視点から描いた貴重な記録である。

第３巻『沖縄・労働・野宿』—労働が人生をつくり、そして壊す

第３巻では、沖縄から本土へ渡った人々の労働史が中心となる。建設現場、工場、港湾、運送、日雇い労働など、日本の高度経済成長を支えた現場で働いた人々が数多く登場する。彼らは決して働かなかった人ではない。むしろ誰よりも働いてきた人々である。しかし、病気、けが、高齢化、産業構造の変化、家族との断絶など、複数の要因が重なり、最終的に野宿生活へ追い込まれていく。この巻を読むと、「自己責任」という言葉がいかに単純な説明であるかがわかる。人生は一つの原因で決まるものではない。社会構造と個人の人生が複雑に交差し

た結果として現在があることが、証言から浮かび上がってくる。

第４巻『沖縄・文化・つながり』—失われない故郷

第４巻は、沖縄との文化的なつながりに焦点を当てている。故郷へ帰っているのか、家族と連絡を取っているのか、沖縄のニュースを見るのか、エイサーや民謡を聴くのか—。一見すると些細な質問である。しかし、それらを積み重ねることで、「人は野宿生活になっても故郷との関係を完全には失わない」ということが見えてくる。文化とは単なる伝統芸能ではない。音楽、言葉、天気予報、食べ物、家族の記憶、地域の風景など、人生の深い部分を支えていることがよくわかる。この巻は、人間が社会との関係性をどのように保持し続けるのかを考えさせる内容となっている。

第５巻『ふるさとから「遠く」離れて』—シリーズの集大成

第５巻は、沖縄だけではなく、日本全国の出身者 334 人の証言をまとめた集大成である。北海道から九州まで、日本各地の出身者が登場し、「ふるさと」「親」「兄弟」「正月」「帰る場所」「震災」など、多様なテーマについて語っている。印象的なのは、「帰りたいけれど帰れない」という証言が少なくないことである。故郷は地理的な場所であると同時に、人間関係そのものでもある。家族を失い、帰る家がなくなり、長年連絡を絶ち、「帰りたい」という思いだけが残る。この巻は、野宿とは単に住居を失うことではなく、「社会との関係を失うこと」でもあることを教えてくれる。

「野宿者研究」ではなく「日本社会研究」

この５冊を通読すると、読者の見方は大きく変わると思われる。そこに描かれているのは、「野宿者の人々」ではない。沖縄戦を経験した世代、高度経済成長を支えた労働者、地方から都市へ移住した人々、家族を持ち、地域で暮らしていた普通の市民である。彼らはある日突然「野宿者」になったわけではない。日本社会の変化の中で、長い年月をかけて現在へ至っている。だから、このシリーズは「ホームレス問題」の資料というより、日本社会そのものを描いた社会史なのである。

記録することは、人を社会へ戻すこと

川崎野宿者聞き取りチームの５冊は、野宿者を「支援される存在」として描いていない。彼らは、戦争を知り、働き、家族を持ち、地域で生きてきた人々として語られる。それは「記録すること」が、その人を社会の歴史の中へ位置付け直す営みだからである。社会は、しばしば「見える人」だけの歴史を書いてきた。しかし、このシリーズは、社会の周縁に置かれた人々こそ、日本の近現代史を語る重要な証言者であることを示している。20 年以上にわたり、一人ひとりの人生に耳を傾け続けたこの仕事は、野宿者支援の記録である以上に、「人間とは何か」「社会とは何か」を問い続けた記録である。それゆえ、この５冊は貧困や福祉に関心を持つ人だけでなく、歴史研究者、社会学者、地域史研究者、労働研究者、さらにはすべての市民に読まれるべき第一級の市民アーカイブである。そこには、日本社会が忘れようとしてきた歴史が、人々の肉声として確かに息づいている。

（藤田親継）

『川崎野宿者聞き取りチーム　年報』

協力会費 3000 円　年報購入のみの場合 2000 円
※収益が発生した場合、すべて野宿者聞き取り活動に使います
郵便振替口座:00270−8−83613　講座名:川崎野宿や聞き取りチーム
（ゆうちょ銀行以外から　029店　当座0083613
編集:水島陽　発行:川崎野宿者聞き取りチーム

［連絡先］〒
210−0014　川崎市川崎区貝塚2−8−7　貝塚ホール
TEL　044−230—0560
Fax　044−230−0559
E—mail　story@jcom.zaq.ne.jp

【文化欄 文学編】満州移民が登場する小説二編―水上勉「比良の月」と畠山丑雄の「叫び」

練馬では、「中国「帰国者」・家族とともに歩む練馬の会〈同歩会〉」が長年活動をされてきた（中国帰国者とは、第二次世界大戦末期に旧満州（中国東北部）などの地域に残留を余儀なくされ、1972年の日中国交正常化以降に日本へ永住帰国した「中国残留邦人」（孤児や婦人など）と、その家族を指す）。ということもあって、満州移民に関心を持ってきた方が少なからずいらっしゃる。中川寿子さんも、そのお一人である。

■水上勉「比良の満月」



最近、中川さんから、水上勉の「比良の満月」（初出は『週刊文春』1964年４月20日号。翌年、書籍『比良の満月』（桃源社）に収録）の『水上勉作品集 日本の戦争』（新本出版、2008年）収録版）をいただいた。

水上自身、1938年８月にハルビン丸に乗り、大連を經由して奉天へ辿り着いた。満洲では国際運輸会社の苦力監督の見習として働き、肺結核で強制帰国を命じられるまでの半年間を過ごしたこともあり、「満州」にまつわる作品を多く残している。

「比良の満月」もその一編。その主人公は、京都府の職業課雇職として、15歳から18歳までの少年を対象とした「満州開拓義勇軍」（少年義勇軍）の募集係をしていたことがあるという人物だ。上司のO主事補と丹波地方を、移住勧誘のために回った体験を持つ。大布施という所での勧誘の際のことだ。同村から既に移住していた家族の映った映画を上映したこともあり、O主事補の熱弁も含め、人々の感動を呼んだ。だが、移住申告書をもらおうとする者はいない。だが、主人公とO主事補の宿に、大布施からさらに奥の月形から姉弟が訪ねて来る。姉は「満州へゆきたい・・・とそればかり思いつめて」いる弟の時岡勇を義勇隊に入れて欲しいと懇願する。父母は既に死に、姉弟だけの暮らしだったから、姉は当初は反対だった。だが、「満州の稲づくりにゆくことは・・・兵隊にとられるよりは・・・いい」と、思うようになったという。勇は茨城県の「内原訓練所」で指導を受け、移民していく。主人公は、勇の村での壮行会に出、敦賀港まで送る。主人公が勇を見たのはそれが最後。勇が生きて帰ってきたという消息は二十六年経った後もきいていない。今は作家となっている主人公は、琵琶湖畔の旅館の主人に比良山の向こうは丹波地方と聞き、月形の姉弟のことを思い起こす。その夜の月は、満月だった。それ以来、ときどき主人公は比良の月を眺めにゆく。

■畠山丑雄「叫び」

今年の第74回芥川賞受賞作の一つ、畠山丑雄の「叫び」も、満州移民が登場する。川又青年である。その師匠は罌粟栽培が盛んだった茨城の農民、二反調音蔵。音蔵の開催していた罌粟栽培製造セミナーに川又青年は参加し、音蔵に誘われ熱河に指導に行く。音蔵は、熱河をいちめんの塗り替えることになったのは「天皇陛下」（裕仁）が裁可した熱河作戦がきっかけだと言う。そして、「陛下」への恋闕の情を以て熱河をありたけの花で埋め尽くすことは、「男子の本懐」だのと川又青年を口説く。そして、「一九四〇年の紀元二六〇〇年記念万博」のチケットを渡す。川又青年は、「音蔵とどこまで意を一にしていたかは定かではない」が、音蔵帰国後も「大陸のあちこちで罌粟栽培阿片製造の指導」を行う。その挙句、戦後帰国した川又青年は、鉱山跡地で閉山中の鉱山の奥の坑道で阿片に酩酊するような生活を送り、「最後は路傍に転がり、鳥や野犬の餌食になる」。

だが、主人公は川又青年ではない。早野ひかる。37歳。独身のヒラ公務員。マッチングアプリで出会った女性と結婚の約束をし、茨木に家を建てたが、高級料理器具目当ての結婚詐欺まがいだったようで、独り暮らし。キャバクラ通いでトラブルを起こすなど「危うい」生活をしていた折、深夜に散歩していて鐘の音に誘われて銅鐸づくりをしている先生と出会い、郷土史にはまっていく。小説冒頭の言葉で言えば、「土地」に「自縛」されていく。

川又青年のことも、その先生に聞いた。そして、先生が「それがもともと自分の夢ではなく音蔵の夢だったことも忘れて夢見た」と語った川又青年に倣うかのように、川又青年の道を辿っていくようになる。その結末は、坑道で見つけた1940年万博チケットと引き換えたチケットで入った2025年大阪万博会場の「肇国記念館」の前で出会った川又青年を追いかけて早野は天皇の前に飛びだしていき、逮捕される。無論、1940年版万博で予定されていた「肇国記念館」が2025年大阪万博の会場にあるわけもないし、川又青年も生きてはいない。早野の幻視だ。逮捕後の早野は、川又青年に成り代わって「鐘を・・・鳴らし続けなあかんのです」などと言い続け

る。挿話のワイズミュラーの話の部分の言葉で言えば、川又青年を演じるうちに、演じているということを忘却し、恍惚状態に至ったといったところだろう。

その早野が幻視した川又青年が「一回挨拶に行かへんと」と天皇に向かっていく。その前に川又青年は、早野にこう語る。

> もう僕ね、せんど腹立って、叫んだったんですわ。・・・あいつら僕のこと、犯罪者扱いしよるんです。狂人扱いしよるんです。天皇陛下のために花畑つくるんやって、大陸行って人一倍頑張っとった人間に対して、それはないやろと。いや僕かて負けたんはわかっとるし、占領されたら、まあ向こうさんに従ういうのもわかりますわ。陛下かて立場あるから、よう頑張ったとな、って言いたくても、もう言われへんのもわかる。せやけどそういうのはぜんぶ体(てい)やろ、と。大事なんはそれよりも心の中やろ。それを忘れたことにしているうちに、ほんまに忘れてもうたのはお前らやろ。・・・

「お前ら」に天皇が入っている。「恋闕の情」を裏切った天皇への愛憎入り交じった「叫び」。それが小説のタイトルになっているというわけだ。三島の「憂国」風のモチーフで、天皇批判とは言い難いが、天皇の戦争責任を問うものではある。小説の末尾は、早野＝川又は「本人を呼んでください」。曖昧な表現をしているが、「天皇呼んで来い！」だ。

この小説では早野の先生の言葉として、以下のような天皇観が語られている。

- 「国家の霊的な面での統合を家とすると柱のようなもの」が「聖」である。
- 聖は「世のため人のため鐘を鳴らしてくれる人」だ。
- 天皇は「官製の聖」である。だが、「官製の聖」（天皇）の霊力は衰退の一途を辿っている。
- よって、福祉によって「労働からの解放区をつくって民間から聖を輩出する」。



「霊力」ということで言えば、ここでは“天皇霊”が想定されている。個々の天皇の霊力ではない。だからヒロヒトでなく、ナルヒトであっても、天皇として川又青年の問責対象になる。その霊力の衰退とは、「世のため人のため鐘を鳴らす」力の衰退である。その原因は、国策に殉じた者への裏切りだ。一方、「働く能力あり」とされながら生活保護で暮らす先生を登場させているあたりは福祉叩きの定番の論理に陥っている点は指摘しておきたいが、ストーリー的には「鐘を・・・鳴らし続けなあかんのです」と言う早野は民間の“聖”になったということだろう。その“聖”は、天皇に、そして万博会場の大屋根リング周辺にたむろした人々に、国策に殉じた者を裏切った故に天皇の霊力が衰退したのだと鐘を鳴らす。

小説では、早野と一緒に2025年大阪万博に行くしおりさんにまつわる話にも紙数が割かれている。罌粟栽培を試みるようになった早野が窓の外に幻視した大陸の花畑にいる川又青年との会話で、しおりさんのことを「聖や思てます」と言うのだが、それは早野が川又青年に成り代わっていく危うさへの警鐘を鳴らしているということのだろうか。しおりさんの父親との関係といった挿話も盛り込まれているのだが、意図が理解できない。芥川賞の選評でも、「銅鐸への執着、歴史への拘泥、好きな女性を聖と見做すような萌えが三つ巴にうなっているスラップスティックとして評価された」（島田雅彦）と言われつつも、「こんなにとりとめがなくても良いものなのかとふと白ける瞬間がなくもない」（松浦寿輝）と言われている。天皇に向かって行って逮捕される「最後のエピソード」を「まったく不要」という評まである（山田詠美）。

まぁ、関西弁の軽妙な全編パロディとも言え、読んで損はないと思う。

■「比良の満月」には、送り出しという移民に対する加害への反省は描かれているが、現地の人々からすれば移民もまた侵略者であったことについては筆が及んでいないように思う。「叫び」の方は、戦後、中国側の憲兵に厳しく取り調べられたと川又青年が語っている。だが、加害への反省は乏しい。加害の頂点である天皇が責任を負うことなしに生き延びた欺瞞を問うてはいると読めなくはないが、陛下のためにやったのに裏切られたという愛憎に重きが置かれている。被害者であり加害者である捩れにどう切り込むのかは、文学に限らず、難しい課題だと改めて思う。

■「満州」にまつわる小説は数多い。船戸与一の『満州国演義』とかにも言及したいが今回はやめておこう。川村湊の『文学から見る「満州」』とかを読み直してみようかな。

【特別寄稿】芦浜原発反対運動の背景、地域の特性、学ぶ点など

2026.6.20 中村利也(古和浦出身者)

６月 20 日、日本橋公会堂で、ドキュメンタリー映画「原発夫婦―芦浜原発計画と戦った 37 年間のこと」（内谷正文監督）の上映会が行われた（主催：同上映実行委員会）。同映画は、反対を貫いた小倉正巳さん・小倉紀子さんのインタビューを中心に、ご夫婦の思いを受け継ぐ女性たちとの交流を描いた作品である。以下は、同上映会で配布された舞台となった古和浦出身の中村利也さん執筆資料の転載である。反戦と反核を結ぶ問題意識から、掲載した次第である。改めて、転載を許諾していただいた中村さんに感謝申し上げる。



芦浜は三重県の南部、熊野灘に面した辺鄙な海岸に位置しています。集落はリアス式の海岸の湾の奥に点在し、集落からの道は西側の錦浦（大紀町、当時は紀勢町）からしかなく、人の住んでいない、船も接岸出来ない、多くの原発建設地がそうであるように、「利用価値のない」浜です。昔の伊勢の国と紀伊の国の境に位置していますが、浜の真ん中を国境が走っているのではなく、紀伊側の面積の方が多くを占めます。この微妙な差が原発反対運動に少なくない影響を与えていたと思います。

そうした辺鄙な浜が 1963 年、日本で最も初期の（美浜原発が一番早かったようですが）原発建設地に選ばれました。当初は、「時代の最先端」「未来のエネルギー源」である原発を歓迎する雰囲気が地域にはありました。三重県南部は、現在も「南海トラフ地震」を直接受ける地域であり、実際に 1944 年と 45 年、巨大な地震が地域を襲い（昭和東南海地震）、大きな被害を受けました。1959 年には伊勢湾台風、1960 年にはチリ津波が押し寄せ、度重なる自然災害で地域は疲弊し貧しい暮らしを強いられていました。地元の人々は近海漁業だけではなく、カツオ船など遠海漁業に従事していました。また地域の共同体意識が強く、人々の意識は概ね保守的で自民党の地盤でした。そうした地域に「未来の灯」がやって来ることは歓迎されることだったと思います。

しかし期待は早々と不安、不審に転換していきます。原発の排出する「冷却水」が海の環境に影響を与えることが分かったからです。当時三重県南部の海岸は真珠を育てるための「アコヤ貝」養殖で潤い始めていました。綺麗で水温が安定した海がアコヤ貝養殖には欠かせない条件だったのです。

この地域はもう 1 点、原発立地や反対運動に影響を与えた特徴があります。当時の南島町には海に面していても漁業に従事しない（出来ない）集落がありました。「竈」と呼ばれる集落で、「平家の落人部落」と呼ばれていました。後から移住してきために漁業権がなく、農業や林業で生計を営んでいました。そして芦浜の伊勢側の土地は「竈」の人々が所有していたのです。「浦」の人間は漁業権はあるが芦浜の土地は持っていなかったので、中部電力に土地を売らない事で抵抗することはできなかった訳です。何の価値もない土地を中電に売ってしまう「竈」の人々の気持ちは良く理解出来ます。



第一次原発反対闘争は、こうして芦浜近辺に漁業権を持っていた古和浦の漁民が主力となって闘われました。そしてわずか 3 年で知事による「終止符宣言」を勝ち取りました。

しかし、程なく芦浜の土地を取得した中部電力の激しい巻き返し、札束攻勢が始まります。当初は拒否していた古和浦の漁民が徐々に金の力に負けていき賛成派が多くなっていくのは、一つには衰退したアコヤ貝養殖に代わって主力となった「ハマチ養殖」が振るわなくなったからです。原因はいくつか指摘されています。ハマチ養殖にはサバなどを餌で撒くのですが、食べカスが湾の底にたまります。しかし湾は狭く、内陸に奥まっているため海の流れは弱く（それが静かな海を必要とするアコヤ貝養殖には向いているのですが）カスが外洋には出ていきません。栄養過多になった海には赤潮が度々発生し、ハマチ養殖に悪影響を与えるという悪循環になった

そうです。

80年代になると全国的にも過剰生産となり、餌代などのコスト高が続き、赤字を抱えた漁民が多く出たそうです。そうした時、意図的と思われる「ハマチバッシング」が起きます。1986 年東京のキー局が「恐怖のハマチ」という報道番組を放映します。養殖ハマチは薬漬けのうえ、漁網防汚剤として使われていた有機スズがハマチの奇形を起こす原因だというのです。ただ、当番組はこの地域では何故か放映されず、「漁師は養殖ハマチは食べない」と語っていた「漁民」は原発推進派の幹部でした。「危険だ」という説明も科学的には根拠が乏しいものでした。しかし翌年には全国紙で獣医の専門家が「警鐘」を鳴らし、養殖ハマチは大暴落を起こします。また古和浦漁協の多額不良債務問題も発生、漁協が中電の預金二億五千万円を受け入れるなど、次第に中部電力の影響力が広がり、賛成派が多数を占めるようになります。そしてついに1994年2月、古和浦漁協総会は「原発反対決議撤回」を可決します。第一次反対闘争の拠点だった古和浦は賛成派が多数を占めるようになります。

小さな集落は賛成派と反対派に分断され、親兄弟、親戚、友人間でも感情的な対立が生まれ、反対派への嫌がらせ、暴力沙汰が続きました。そうした中で、『原発夫婦』の主人公、小倉正巳さんは唯一人の反対派理事として最後まで抵抗を続けます。

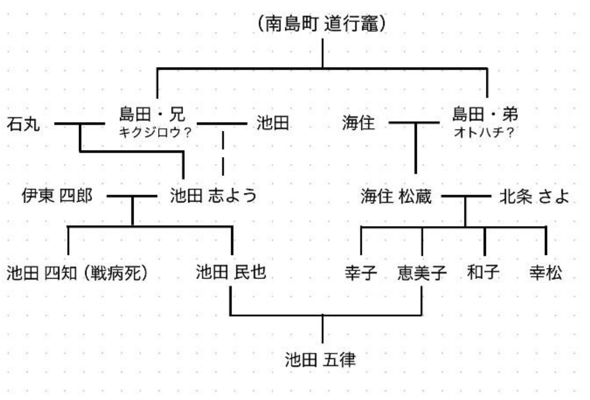
第二次の反対運動の主力になったのは地域的には隣の集落である方座浦でした。特に女性が大きな役割を発揮したそうです。また、第一次は比較的南島町内での運動でしたが、漁協を財政的に支援する「SAVE 芦浜基金」、「原発いらない県民署名」などをはじめ、県内ばかりか全国的な支援運動が広がりました。

地域の深刻な分断、反対運動の高まりの中で、1995 年に知事に就任した北川正恭氏が仲介に動き、97 年に南島、紀勢両町、中部電力に「99年末までの休止」を要請、そして2000年2月「芦浜原発計画を白紙に戻す」と表明したのです。

古い共同体が残る辺鄙な村に押し付けられた国策としての原発計画が如何に地域を分断してきたのか、それをはねのけた力も実は地域の共同体の力でもありました。また、そこと結びついた若い世代の力、全国的な支援の闘いも大きな役割を果たしました。当初から「冷却水」問題に注目するなど、原発の危険性を的確に理解していたことも運動に正当性、普遍性を与えました。芦浜原発反対運動はこうして現在の私たちにも大きな教訓、希望、学びの材料を提供してくれると思います。

〔編集部より〕脱線ですが、私のご先祖も竈出身です　　池田五律

南勢町と南島町は、現在、合併して南伊勢町になっている。古和は南島町。実は、本誌編集担当の池田五律の二人の曾祖父は、古和からは離れているが、南島町出身である（右系図参照）。中村さんの原稿に出てくる「竈」の出身だと聞いている。多分、道行竈だと思われる。「竈」は、塩竈の「竈」。塩焼きを生業にしていたことに由来するようだ。曾祖父兄弟の姓は島田。中村さんにお借りした『海賊の道　伊勢・志摩の水軍と落人』（榊原和人、誠文堂新光社、1985 年）によれば、「竈方五姓」といい、道行などが島田姓だそうだ。平家の落人だから裃を着て集まって弓を射る祭りがあるなどということを、子どもの頃、志ょう、松蔵から仄聞した記憶がある。島田兄が弓を射っている白黒写真もあった。島田兄弟は、鍋釜の修理や大工仕事をしながら、三重県中を渡り職人風に経めぐっていたそうだ。島田兄は、「どの村行ってもモテたんだ。峠に差し掛かると、見かけた村の娘たちが「来た、来た、来た！」と大騒ぎだったもんよ」と、自慢していたと聞いた（笑）。島田兄は、津で石丸に婿入り。石丸は、伊予町の商家。藤堂高虎が伊予から津に移ってきた際に連れて来た商人の裔と言う。石丸家の墓には、五輪塔の墓が一基あり、粗末に扱うと裃着た人が枕元に座るとか、あの墓は実は隠れ切支丹だったのでは・・・など語られていた。石丸に婿入りして産まれたのが、志ょう。島田兄は、妻が死んだので、娘を連れて、池田に婿入り。池田は池田屋長兵衛だか長吉だか、万町の商家。方や島田弟は、南北朝時代から戦国にかけて北畠が本拠地とした多気（伊勢本街道沿い）で海住に婿入り（北畠の家臣の末裔と称す）。「竈」も海住もいわゆる貴種流離譚を支えにしてようだ。前掲の『海賊の道』には、「長い間、結婚は竈方の間で行われてきたという話」を聞いたとの記述がある。昨年、相次いで亡くなった私の両親が又従弟同士の結婚だったことにも、つながっているようにも思える。



【科学哲学への招待13.】カルロ・ロヴェッリ『世界は「関係」でできている 美しくも過激な量子論』

（冨永 星 訳、2021年、NHK出版）

第一部
第一章 奇妙に美しい内側を垣間見る
1 若きハイゼンベルクの突拍子もない思いつき
―「オブザーバブル」
2 シュレーディンガーの紛らわしい ψ―確率
3 この世界の粒状性―量子

第二部
第二章 極端な思いつきを集めた奇妙な動物画集
1 重ね合わせ
2 ψ を真剣に受け止める
―多世界と、隠れた変数と、自発的収縮と
3 不確定性を受け入れる
第三章 みなさんにとっては現実、
でもわたしにとっては現実ではない事柄とは？
1 かつて、この世界が単純に見えたことがあった
2 関係
3 希薄で曰く言いがたい量子の世界
第四章 現実を織りなす関係の網
1 エンタングルメント
2 三人一組の踊りが織りなすこの世界の関係
3 情報

第三部
第五章 立ち現れる相手なくして、明瞭な記述はない
1 ボグダーノフとレーニン
2 実体なき自然主義―状況依存性
3 土台がない？ ナーガールジュナ
第六章「自然にとっては、すでに解決済みの問いだ」
1 単純な物質？
2「意味」は何を意味しているのか
3 内側から見た世界
第七章 でも、それは本当に可能なのか

今回は、2026年6月号でピーター・ウォイトの『ストリング理論は科学か』をご紹介した際に、量子重力理論の有力候補とされるストリング理論に対して、「もう１つの有力候補」と言及したループ量子重力理論の提唱者の一人、カルロ・ロヴェッリの著作をご紹介しようと思います。

「ロヴェッリさんってすごい博覧強記なのに、読みやすい文章書く人だね！」と最近すっかりロヴェッリさんにハマりつつ、「あれ？ロヴェッリさんはループ派の人でいいんだっけ？」と混乱している池田編集長のために、少し整理した方が良いかと思ったので…。（余談ですが、池田編集長は子どもの頃、ボシカテイを「母死家庭」だと思い込んでいたそうだけど、私は中学生の頃にフヨウカゾクが「不要家族」でないことに気づき、高校生くらいまでハクランキョウキを「白乱狂気」だと勘違いしていました。そういうことってありますよね？？）

アクション科学哲学会の皆さんも、「こういうテーマがいい」とか何かリクエストがありましたら、ご遠慮なくおっしゃってくださいね♪

カルロ・ロヴェッリ（1956年5月3日―）はイタリアのヴェローナ生まれ。ボローニャ大学を卒業後、パドヴァ大学大学院で博士号を取得。イタリアやアメリカの大学勤務を経て、現在はフランスのエクス＝マルセイユ大学の理論物理学研究室で、量子重力理論の研究チームを率いています。

そして、ロヴェッリは一般向けの本を数多く執筆しているため（それも日本語訳されて出版されているため）、「前作の『時間は存在しない』からご紹介するのがいいのかな？」とか「それとも、最新作の『ブラックホールは白くなる』？」とか迷ったのですが、「やっぱり、ループ量子重力理論の解説も兼ねるなら、ロヴェッリ本人が量子論の『関係を基盤とする（リレーショナルな）』解釈を中心に据えているというコレが良さそうかな？」ということで、今回はこの本を取り上げることにしました。

いつものようにざっくりとした説明ですが、ストリング理論とループ量子理論の違いについて。素粒子論において素粒子が点だと仮定すると生じる問題に対して、弦が振動していると仮定したのがストリング理論で、ストリング理論には「素粒子論に由来するこの理論、量子重力理論を構築するアプローチとしても使えるのでは?」ということで研究されてきた背景があります。その研究の中では、「一般相対性理論で説明される時空を量子化する」という問題は置き去りにされ、他の側面からの量子重力の問題への取り組みが進められることになりました。

それに対して、初めから量子重力理論の構築を目的として提唱されたのがループ量子重力理論です。ループ量子重力理論においては、時間や空間は根源的な要素ではなく、ループという根源的な要素から組み立てられる二

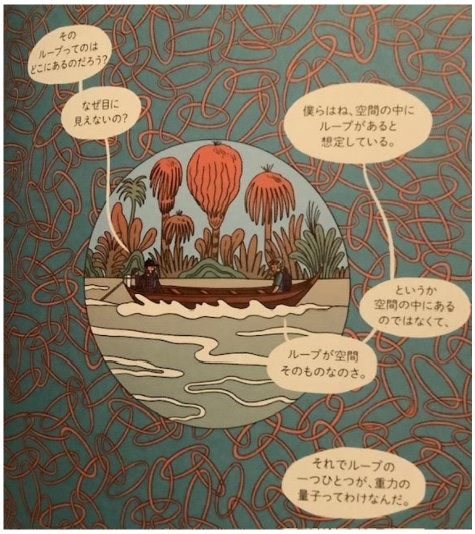
次的なものとして扱われます。この理論は「ループの一つ一つが重力の量子で、それぞれのループが他のループと輪つなぎになって、相互作用する関係性から成る網を作り出している」という「関係を基盤とする（リレーショナルな）」解釈の理論で、本書のタイトル『世界は「関係」でできている　美しくも過激な量子論』につながることになります。

前号の【雑誌漁り読み】、『現代思想』のアラビア哲学特集を紹介するコーナーで池田編集長が「『アシュアリー学派では時間は流れない』と語られていて…現在の宇宙論に通じていると思った」と書いていましたが、その思いつき、的外れではありません（よね？渡部さん？）。詳しくは『時間は存在しない』の方に書かれていますが、「ループ量子重力理論では時間は流れない」ので。『時間は存在しない』の原書タイトルは“L'ordine del tempo”…ロヴェッリはアナクシマンドロスの言葉に由来してこのタイトルを付けているのですが、アナクシマンドロスの時間論は「不変なものは存在せず、継続的に変化する現象や出来事があるのみで、時間は後から付いてくる」というものです。

『世界は「関係」でできている　美しくも過激な量子論』もまた、原書のタイトルは全く違って、“Helgoland”です。そのタイトルの理由について、ロヴェッリは以下のように述べています。

> 「…一九二五年の夏に、二十三歳のドイツの青年が北海の吹きさらしの孤島、『聖なる島』を意味するヘルゴランド島で一人不安な日々を過ごすこととなった。そして、そこで、さまざまな御しがたい事実をすべて説明し得る着想、量子力学の数学的構造―すなわち『量子論』の確立へとつながる着想を得る。史上もっとも偉大な科学革命が始まったのである。その若者の名は、ヴェルナー・ハイゼンベルク。この本の物語は、彼から始まる。…この本で語るべき物語は、ハイゼンベルクがその着想の萌芽を得た島から始まり、現実の量子的構造の発見がもたらしたさらに大きな問題を取り込みながら、着実に広がっていく。」

ということで、行列力学と不確定性原理のハイゼンベルクから始まりますが、第三部・第五章ではボグダーノフとレーニンも登場します。マッハやボグダーノフを「観念論者」と断じて批判したレーニンによれば、「精神の外側の現実が存在することを否定し、自分という主体を唯一の実在とする」のが「観念論」。レーニンは「唯物論」を「精神の外側に世界が存在するという信念」と定義して「観念論」に対置し、「この世界には時間と空間のなかを動く物質以外に何もない」と考えるしかなく、自分たちはその物質を知ることで「確かな真実」に到達できると主張します。こうしたレーニンの主張に対して、ボグダーノフはマッハのいう「感覚」は「頭のなか」にあるのではなく、この世界の自然現象であり、現象は世界から切り離された「自己」に到達するのではなく、自然の要素である皮膚に、脳に、網膜のニューロンに、目の受容体に到達すると反論。



文 ルーカ・ボッツィ／絵 エリーザ・マチェッラーリ『マンガでわかる カルロ・ロヴェッリの物理学』より

この論争を受けて、ロヴェッリは、「この世界には時間と空間のなかを動く物質以外に何もない」という前提に対するマッハの批判がアインシュタインの一般相対性理論に与えた影響、「何ものの実在も、それによって現象が組織されない限り当然としない」というマッハの解釈がハイゼンベルクの電子の捉え方に与えた影響にも言及しながら、マッハを再評価していきます。そして、社会生活は「集団としての労働の組織化」、知識は「経験と概念の組織化」、科学的知識は「集団的に組織化された経験」…というように「組織化」が鍵となっているボグダーノフの理論も、ノーバート・ウィーナーのサイバネティックスやルートヴィッヒ・フォン・ベルタランフィのシステム理論に深い影響を与えたとして、ロヴェッリは再評価しています。

同じく第三部・第五章では、「あらゆるものは別の何かに依存する形で、別の何かとの関係においてのみ存在する」「あくまでも相互依存と偶発的な出来事の世界であって、そこから『絶対的な存在』を引き出そうとするべきでない」というナーガールジュナの思想にループ量子重力理論をなぞらえつつ、「わたしは哲学者ではなく物理学者、いわば卑しい職人だ」とロヴェッリは失言しています。（もし私が職人さんだったら「わたしは職人であって、卑しい物理学者ではありません！」とお言葉をお返しするところです。）

けれど、「哲学に耳を閉ざした科学は、浅薄になって枯れていく。同時代の科学的知識にいっさい関心を持たない哲学は、愚鈍で不毛だ」（エッセイ集『規則より思いやりが大事な場所で』の『科学に哲学は必要か』より）と明言しているハクランキョウキなカルロ・ロヴェッリ…「物理学者であると同時に哲学者である」ようにしか私には見えません。

そうそう、ロヴェッリのエッセイ集『規則より思いやりが大事な場所で』には『ロジャー・ペンローズ』という一編も収録されていますよ、としまるさん！

佐藤えり

【防衛省・自衛隊動向 7月1日～7月31日】

7月１日　航空宇宙自衛隊への改編見据え、整備計画局に宇宙関連の防衛力整備などを担当する参事官を新設。

7月２日　警戒航空団第603飛行隊のE-2D早期警戒機、オーストラリアで実施される日米豪共同訓練「サザン・クロス26」に参加する途中、フィリピン、インドネシアに寄航。

7月３日　5月29日から行われていた第７普通科連隊など参加の日米豪共同演習「サザンジャカルー26」終了。

7月６日　日米濠共同訓練「サザン・クロス26」開始。16日まで。豪州ダーウィン空軍基地およびティンダル空軍基地周辺にて実施。E-2D 2機のほか、第3航空団(三沢基地)所属のF-35A戦闘機6機、第3輸送航空隊(美保基地)所属のKC-46A空中給油機が参加。

7月６日～９日　小泉防相、NATOアンカラ首脳会談出席。日蘭防相会談（７日）。コンロイ豪州国防産業大臣兼太平洋島嶼国担当大臣との会談（８日）。

7月６日～10日　海自とトンガ海軍が共同訓練を実施　IPD26派遣立入検査隊が立入検査訓練。

7月８日～９日　海自遠洋練習航海部隊がNATO海上部隊と共同訓練を実施。ニューヨーク沖。

7月９日　沖縄本島北西東シナ海上空域で、空自第9航空団(F-15×2機)と米空軍(F-22×2機)、共同訓練。

7月11日～23日　**イラン・ホルムズ海峡へ派遣が検討される中、海上自衛隊、陸奥湾で掃海訓練開始**。全国の部隊から掃海艦艇や母艦など10隻、哨戒機や掃海ヘリコプターなど8機、隊員約800人参加。米豪軍も。

7月13日　加野防衛審議官、インドのシン国防次官と第８回日印防衛政策対話。

7月14日　改正ドローン規制法」が施行　皇居・自衛隊基地など重要施設の周辺“1000メートル”が飛行禁止に、罰則も強化。法改正前に、各地で自衛隊と警察が“違反ドローン”想定し訓練（例：13日に愛媛）

7月21日～24日　自衛隊統合防災演習。参加隊員数：約15,000名。米豪軍も。

7月21日　**骨太の方針2026、「退職自衛隊員・家族への支援について、新たな庁の設置を含め取組の強化を検討する」と明記。**

7月22日　・陸上自衛隊第1空挺団、米空軍機からの夜間空挺降下訓練。

・小泉防相、訪問先のベルギーで、核戦力を増強する欧州の動向に言及しながら「あらゆるタブーなく議論をしなければ、もはやどの国も一国で安全保障を確立することはできない。これは当然のことだ」と語る。

・熊本日日新聞、陸上自衛隊中央情報隊(東京・埼玉、朝霞駐屯地)の対外情報部門「現地情報隊」が、日本人の大学教授やNPO法人代表ら市民を対象に、「愛国心」や「対自衛隊感情」といった思想信条の情報を組織的に調査・収集しているとみられることが22日、元隊員らへの取材や関係資料で分かった、と報道。

・「リム・オブ・ザ・パシフィック（RIMPAC）2026」演習の一環として、退役したタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦「モービル・ベイ」と、タラワ級強襲揚陸艦「ペリリュー」をハワイ沖で標的艦として使用したと発表。日本も参加しており、陸上自衛隊は12式地対艦誘導弾を使用したほか、海上自衛隊の護衛艦「こんごう」もハープーン対艦ミサイルを発射したと発表されている。

7月24日　・航空自衛隊が米軍と共同訓練　F-2、F-16、MQ-9などが参加。

・護衛艦「ゆうだち」が米海軍と南シナ海で共同訓練を実施。

・木原稔官房長官、外国人政策の関係閣僚会議で「緊急的な体制整備」を速やかに行うよう指示。年度内に、入管庁の職員を226人増員。**入国警備官について、防衛省と連携し、退職自衛官にも応募を呼びかけ**。

7月27日　中国大使館侵入事件の自衛官起訴。

7月28日　熊本震災。陸・海・空の航空機20機が上空からの被害情報収集。熊本県庁等に連絡員を派遣。初動対処部隊も出動。熊本県知事による北熊本駐屯地の第8師団長への災害派遣要請。第8師団が3,600名態勢で活動を開始。陸上自衛隊第42即応機動連隊と第8偵察隊を中心に、イオンモール熊本での人命救助。

7月29日　護衛艦「ちょうかい」がトマホークミサイルの実射試験を実施。

【呼びかけ＆集会案内】

■戦争・治安・改憲 NO!総行動＋α

★米軍がキューバを攻撃したら　集まれ！アメリカ大使館抗議行動 攻撃が午前の場合:当日18:30　攻撃が午後の場合:翌日18:30　住友不動産虎ノ門タワー(旧 JT ビル)前集合 ★自衛隊ホルムズ海峡派兵が決まったら　集まれ！官邸前抗議行動 決定が午前の場合:当日18:30　決定が午後の場合:翌日18:30 戦争・治安・改憲NO！総行動＋α

☆NO！WAR　許すな！トランプ　倒そう！高市政権　2026 年後半の闘いを展望する　8・23討論集会

日時　8月 23 日(日)　13:00 開場　13:30 開始　会場　南部労政会館

問題提起　世界を覆う戦争にどう向き合うか　鵜飼哲さん(一橋大学名誉教授／フランス現代思想)　他

☆9条改憲反対の論理を深めるための討論会

纐纈厚さん著『非武装中立のリアリズム』を叩き台に　日時:9月3日　18:30　月島区民会館

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション

☆第二月曜日学習会　連絡先:090－5208－5803(池田)

●8月10日(月)19:00　サポート練馬　　問題提起　中川信明さん他

戦後81年目の8・15を前に考える 戦争・スポーツ・ナショナリズムー国旗損壊罪とサッカー・ワールドカップを中心に

●9 月 14 日(月)19:00　サポート練馬　骨太の方針2026と防衛予算概算要求から安保三文書改定の中身を問う

☆読書会@藍苑■　沖縄県知事選を前に・・・　沖縄の闘いの歴史を読む　古波藏契『ポスト島ぐるみの沖縄戦後史』

8月 25日(火)19:00

参加申し込み先　090－5208－5803(池田)　※限定 7 名までです。参加希望の方は、事前に連絡ください。

■練馬からも参加しませんか？　麻布米軍ヘリ基地フィールドワーク　※所要時間は1時間半程度(予定)

9 月 5 日(土)　 10:00出発　9:50　千代田線・乃木坂駅5番出口集合

案内人　板倉博さん　(麻布米軍ヘリ基地撤去実行委員会共同代表)

呼びかけ　NO！有事法制・足立の会　※練馬から参加を希望される方は090－5208－5803(池田)まで連絡ください

■「満州事変」が引き起こされたのは95年前の9月18日　知っていますか！？　大泉学園に「満州移民」送り出し施設があったことを…

「東京満蒙開拓団」・練馬学習会

お話　藤村妙子さん(東京の満蒙開拓団を知る会)　テーマ　東京の満蒙開拓団―その歴史が現代に問いかけるもの

日時　9月 12 日(土)　17:15 開場　17:30 開会　練馬区石神井庁舎第二・第三会議室

【読者の声】

■「国際法違反の経済制裁が中南米をロシアや中国に接近させてアメリカの安全保障の脅威となる」とよく批判されますが、太田さんのお話を読むと、それが逆に制裁強化の口実になってしまう背景がわかります。フロリダのキューバ系移民に限らずアメリカ人全体が革命前を「本来」と思っているのでしょうね。

■「太田昌国さんに聞く　今現在の“キューバ危機”」の感想をまとめたいと思いつつ返信が遅くなってしまいました。太田さんが紹介しているキューバの映画監督の方の「今になってようやく、等身大の自分が見える」という言葉が深く印象に残りました。植民地主義に浸った社会に生きていることの自覚とともに自らの足下からの協働と連帯の試みを探っていきたいと思います。

〔編集後記〕「戦後 81 年目」と 9 月 12 日に「東京満蒙開拓団」・練馬学習会をやることに絡んで特集化しようと思っていたのだが、上手くいかなかったので「小特集　戦後 81 年目の 9 月を前に」と苦肉の策。次号はいかにせん。追悼が並んだのはとても悲しい。酷暑に負けず、生き抜こう！